



図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2013. October No.175

新連載

新図書館建設に向けて



- | | | | |
|-----|---|-----|--|
| 1 | <p>パリ万国博覧会と報告書 1855-1937—西南学院大学図書館蔵書を中心に—
第2回 1878年パリ万博&1889年パリ万博
図書館長 後藤 新治</p> | 5-6 | <p>データベース紹介
OED_Onlineのすすめ:古今英語語彙のドラマティックな履歴書 前編
文学部 外国語学科 英語専攻 教授 久屋 孝夫
日経NEEDS-Financial Quest 商学部 商学科 講師 小野 慎一郎
日経BP記事検索サービス 図書情報課 山下 大輔</p> |
| 2 | <p>研究ノートから
乳幼児期の「甘え」体験と生涯発達 人間科学部 社会福祉学科 教授 小林 隆児
ブラウジングルーム
古代の写本を紐解く 国際文化学部 国際文化学科 准教授 津田 謙治</p> | 7 | <p>蔵書ギャラリー no.16
『ポール・ロワヤル古書シリーズ』
文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 真下 弘子</p> |
| 3-4 | <p>新図書館建設に向けて
第1回 西南学院大学図書館の歴史 ～知の貯蔵庫から「大学の心臓」へ～
図書情報課 坂本 里栄</p> | | |

パリ万国博覧会と報告書

1855-1937

— 西南学院大学図書館蔵書を中心に —

第2回 1878年パリ万博&1889年パリ万博

図書館長 後藤 新治



Fig. 1 1878年万博のトロカデロ庭園に登場した植民地パヴィリオンの中、ジャン・ド・マルスの日本展示コーナーとは別に、この庭園付き日本家屋が建てられ、人気を呼んだ。A. ビタール編『1878年パリ万国博覧会図説』6月29日号表紙。[Bib. 1]



Fig. 2 エッフェルの橋梁技術を生かして300mの塔を建てるのは理論的に可能であったが、最大の課題はなんと風圧。その後塔がパリの「記号」として認知されるまで、約半世紀を要した。『フィガロ1889年パリ万国博覧会』4月15日号表紙。[Bib. 4]



Fig. 3 A. ビタール編『1878年パリ万国博覧会図説』[Bib. 1]



Fig. 4 フランス農商務省編『1878年パリ万国博覧会公式カタログ受賞者名簿』[Bib. 2]

パリでは19世紀の地図がいまでも使えます。日本では考えられないことです。それくらい、第二帝政期(1852-1870)に行われたパリ都市改造計画の影響力は決定的でした。当時開催された(前回紹介した)

2つのパリ万博はこの「パリの外科手術」に対してあくまでも従属的であり、従って仮設的でした。

ところが普仏戦争敗北後の第三共和政(1871-1940)になると事情は一変します。11年毎に開催される万博の関連施設がパリのインフラに大きく影響を与え始めたのです。それだけではありません。1860年代までの万博は産業ユートピアを実現するという、いわば資本家と労働者の夢を描いたものでした。しかし1870年代以降の万博は資本主義経済におけるエンターテインメント、すなわち消費者の夢を叶えてくれる場所へと変わっていったのです。

3回目となる1878年の万博は1600万人の入場者を得て大成功でした。これまでの主会場ジャン・ド・マルスに加え、セーヌ川を越えた丘の上にはイスラム風のトロカデロ宮が新設され、前に広がる庭園には初めてアジア・アフリカの植民地パヴィリオンが登場しました(Fig. 1)。彫刻家バルトルディと橋梁技師エッフェルによる《自由の女神》の頭部が設置募金のため展示されたのもこの万博でした。

A. ビタール編『1878年パリ万国博覧会図説』(Fig. 1, Fig. 3, Bib. 1)は、1867年の『図説』同様、8頁の週刊新聞の40回分を1冊にまとめたもので、巻末には新たに目次と図版目録が付き検索が便利になりました。各号に「付録」として挟まれた見開きの木版画だけで展覧会が開けそうです。

万博の第一の目的が農業から美術に至る全産業部門のコンクールとその顕彰であってみれば、フランス農商務省編『1878年パリ万国博覧会公式カタログ受賞者名簿』(Fig. 4, Bib. 2)があえて「公式」と銘打っているのは納得できます。前回挿尾を飾った「美術」部門が今回から第1グループに格上げ。

S. ド・ヴァンディエール編『1878年パリ万国博覧会87点の木口木版画による挿絵入り』(Fig. 5, Bib. 3)は万博必見の10スポットを簡潔な解説と大型図版で紹介。1ミリ間隔に数本の線を刻み込むルネサンス以来の職人業は、我が浮世絵の彫師といひ勝負です。

次のフランス革命百周年を記念して開催された1889年パリ万博は何よりもエッフェル塔の存在によって記憶されています(Fig. 2)。会場はジャン・ド・マルスとトロカデロの他に、ナポレオンの柩が安置されたアンヴァリッド前の広場まで拡張されました。主会場の一角で大規模な「フランス美術100年展」が開催される一方、アンヴァリッド前では戦争省パヴィリオンを中心に本格的な植民地展示が始まり、その後の植民地博覧会の嚆矢となりました。

大衆紙フィガロの番外編として大判月刊誌を6ヶ月分まとめたものが『フィガロ1889年パリ万国博覧会』(Fig. 2, Fig. 6, Bib. 4)。報告書の表紙や中の図版に初めてchromotypographieという美しいカラー印刷技術(黄・赤・藍の三原色と黒の網版＝網目凸版による)が導入されたのは特筆すべきです。紹介記事は、以前の産業部門から美術部門や風俗部門へと大きく様変わりしました。

定番シリーズ「1889年パリ万国博覧会図説」(Fig. 7, Bib. 5)も、一部の表紙や図版が手彩色風のカラー印刷になり、C.L. ユアール編『1889年パリ万国博覧会芳名録』(Fig. 8, Bib. 6)では、初めて写真製版による図版が挿入されました。またH.ド・パルヴィル編『1889年パリ万国博覧会700点の挿絵入り』(Fig. 10, Bib. 8)は携帯に便利な(とはとてもいえない厚みの)小型ガイドブック。

だがなんとといっても第4回パリ万博最大の出版物は、本編3冊に図版編別冊が付いたE. モノ編『1889年パリ万国博覧会大鑑』(Fig. 9, Bib. 7)でしょう。「商業大臣、産業大臣、植民地大臣の御墨付き、歴史的、百科全書的、記述の大鑑」全4冊には、エッフェル塔の詳細図から植民地の「原住民」に至るまで、図版と詳細な解説により19世紀末フランスがあまるところなく「表象」されています。

片手では持ち上がらないほどの報告書の重さから、万博にかけた人々の思いが伝わってきます。

(国際文化学部 国際文化学科 教授)

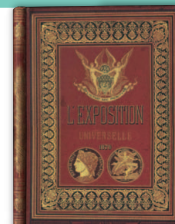


Fig. 5 S. ド・ヴァンディエール編『1878年パリ万国博覧会87点の木口木版画による挿絵入り』[Bib. 3]



Fig. 6 F. 『フィガロ1889年パリ万国博覧会』[Bib. 4]

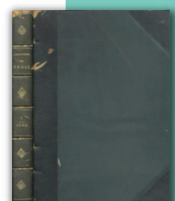


Fig. 7 E. 『1889年パリ万国博覧会図説』全2冊 [Bib. 5]

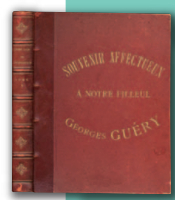


Fig. 8 C. L. ユアール編『1889年パリ万国博覧会芳名録』全2冊 [Bib. 6]

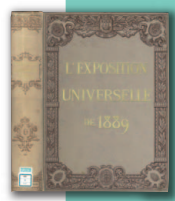


Fig. 9 E. モノ編『1889年パリ万国博覧会大鑑』全4冊 [Bib. 7]



Fig. 10 H.ド・パルヴィル編『1889年パリ万国博覧会700点の挿絵入り』[Bib. 8]

<参考文献>

- Bib. 1) Bitard, Adolphe. *L'Exposition de Paris (1878); rédigée avec la collaboration d'écrivains spéciaux, édition enrichie de vues, de scènes de reproductions d'objets d'art, de machines, de dessins et gravures par les meilleurs artistes*, Paris, Librairie Illustrée; Librairie M. Dreyfous, 1878, 327pp., 378x280mm. [開架 606/9/22] Bib. 2) Ministère de l'Agriculture et du Commerce. *Exposition universelle internationale de 1878 à Paris: catalogue officiel. liste des récompenses*, Paris, Imprimerie nationale, 1878, 531pp., 233x157mm. [開架 606/9/27] Bib. 3) De Vandière, Simon. *L'Exposition universelle de 1878: illustrée: quatre-vingt-sept belles gravures sur bois*, Paris, Calmann Lévy, Librairie-Éditeur, 1879, 159pp., 450x318mm. [貴重書庫 606/9/23] Bib. 4) *Figaro-exposition 1889*, Paris, Goupil & Cie, Éditeurs, 1889, 143pp., 428x325mm. [2012年度教育IP購入図書→図書館所蔵予定] Bib. 5) *L'Exposition de Paris (1889): publiée avec la collaboration d'écrivains spéciaux, édition enrichie de vues, de scènes de reproductions d'objets d'art, de machines, de dessins et gravures par les meilleurs artistes*, Paris, Librairie illustrée, 1889, 2 vols.; tome I, 1er & 2e vols. réunis, 324pp., 377x280mm. [複製版開架 606/9/1C-1]; tome II, 3e & 4e vols. réunis, 324pp., 377x280mm. [複製版開架 606/9/1C-2] [2013年度教育IP購入図書→図書館所蔵予定] Bib. 6) Huard, Charles Lucien. *Livre d'or de l'exposition 1889*, Paris, L. Boulanger, Éditeur, 1889, 2 vols.; tome I, 404pp., 322x257mm. [開架 606/9/29-1]; tome II, 401-796pp., 322x256mm. [開架 606/9/29-2] Bib. 7) Monod, Émile. *L'Exposition universelle de 1889: grand ouvrage illustré, historique, encyclopédique, descriptif; publié sous le patronage de M. le Ministre du Commerce, de l'Industrie et des Colonies, Commissaire général de l'Exposition*, Paris, E. Dentu, Éditeur, Librairie de la société des gens de lettres, 1890, 4 vols.; tome Ier, 666pp., 320x235mm. [開架 606/9/1-1]; tome II, 618pp., 320x235mm. [開架 606/9/1-2]; tome III, 670pp., 320x235mm. [開架 606/9/1-3]; Album, n. p., 320x235mm. [開架 606/9/1-4] Bib. 8) De Parville, Henri. *L'Exposition Universelle Paris 1889; lettre-préface par A. Alphand, orné de 700 vignettes, 4e édition; causeries scientifiques, découvertes et inventions, progrès de la science et de l'industrie, 29e année*, Paris, J. Rothschild, Éditeur, 1890, 694pp., 186x118mm. [開架 606/9/28]

乳幼児期の「甘え」体験と生涯発達

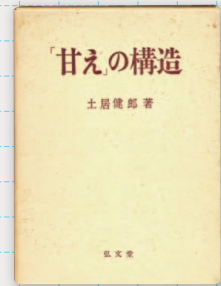
人間科学部 社会福祉学科 教授 小林 隆児

わが国の学問の世界で日本人が独自に編み出した理論は極めて少ない。私の専門とする精神医学や精神(心理)療法の領域で、世界に誇れるものに土居健郎の「甘え」理論がある(注)。心の病としての様々な精神病理(病気の原因や経過)に深く関与するものとして「甘え」に着目し、その理解と治療の道を切り開いたことはつとに有名である。「甘え」は日本人独特の情緒の世界であるが、今では「amae」は世界共通語になっている。「甘え」に着目することが心の病の理解にとって大切なのは、それが非言語的で、情緒的な世界を示し、乳幼児期早期の親子関係に根ざしたものだからである。生後6、7ヶ月あたりから乳児が母親になつくという現象である。土居は「甘え」体験での挫折や享受できなかったことが、後の心の病の発症と深く関係していることを、精神分析に基づく精神療法を通して明らかにした。ただ、土居の「甘え」理論は成人患者を対象とした臨床の中で生まれたものであるため、乳幼児期の「甘え」体験の内実については、今ひとつ説得力に欠けるところがあったのも否めない事実である。

これまで私は自閉症を中心とした発達障害の臨床に長く従事してきたが、この20年間は主に乳幼児期の母子関係に焦点を当てた臨床研究を蓄積してきた。そこで明らかになったことは、乳幼児期早期の生後

数年間における「甘え」体験の質がその後の生涯発達過程を大きく左右することであった。乳幼児の中にはなぜか養育者に甘えようとしない子どもたちがいるが、彼らはけっして養育者を求めないという単純なものではなく、養育者が目の前にいないと心細いにもかかわらず、養育者を前にすると接触を避けるというデリケートな反応であることがわかった。

「甘え」は相手があつて初めて享受できるもので、無力な乳児は相手に全面的に依存せざるをえない。しかし、養育者は様々な事情を抱え、時に子どもの「甘え」を受け止め難いことも起こりうる。乳幼児が養育者にデリケートな反応を示すのはそのためである。このような「甘え」たくても甘えられない子どもの心理を土居は「甘えのアンビヴァレンス」と称したが、私はこの「アンビヴァレンス」が実際の乳幼児にどのような形で表出されるかを明らかにしたことになる。このことは私にとって発達障害のみならずあらゆる心の病の成り立ちと治療を考える上で非常に重要な手がかりを与えてくれていることを日々実感している。



注: 土居健郎「甘え」の構造」弘文堂 初版: 1971年[開架141/6/10B]、2版: 1981年[開架2階 141/6/10-2D]、続編: 2001年[開架2階 141/6/113-2]、増補普及版: 2007年[開架2階 141/6/114]

ブラウジングルーム

古代の写本を紐解く

国際文化学部 国際文化学科 准教授 津田 謙治

古代地中海の人々が想い、悩み、思索した事柄を、わたしたちはどのように知ることができるでしょうか。彼らが手記を書き、巻物などに思想を残してくれていれば、比較的容易にアプローチすることが可能です。しかし、その書物が敵によって焼かれ、歪められたかたちでしか伝えられて来なかったらどうでしょうか。

ここでは、紀元後2世紀に活躍したグノーシスと呼ばれる人々を取り上げてみます。今日では主にキリスト教の異端と見なされる彼らは、世界の創造者が救いの神であることを否定していました。グノーシスの活動の痕跡は、4世紀頃には徐々に歴史の舞台から消えていくのですが、それとともに彼らの残した文書もまた消滅していきました。彼らの思想は、グノーシスに敵対していた正統キリスト教徒によって伝えられています。もちろん、それは憎むべき相手の主張として伝えられているので、偏見、迷信、歪曲された事実、その他余計なものがそこには沢山織り交ぜられています。しかし、グノーシス本人たちの記録が残されていない以上、それがどれほど歪んでいるのか、わたしたちにはわかりません。



コプト語で書かれたナグ・ハマディ文書

状況が一転したのは、20世紀になってからでした。エジプトのある寒村付近でグノーシスの人々が著した書物の写本が見つかったのです。それは、グノーシスに所縁のある人々が、権力者によって自らの思想を抹殺されないように、陶器の壺の中に入れて隠しておいた13冊の写本でした。この壺は、まさにタイムカプセルのような役割を果たしたわけですが、これらの文書は、見つかった近くの村の名前をとって、ナグ・ハマディ写本と呼ばれています。写本の研究から、現在ではグノーシスの人々がどのような思索をしたか、少しずつ明らかになっています。

西南学院大学図書館には、かつて干隈にあつた旧神学部図書館所蔵の書籍が開架書庫に収められていますが、その中に、このナグ・ハマディ文書の校訂版があります(注1)。写本はコプト語で書かれていて、これは古代エジプト語末期の形態になります。古代エジプトと言えば象形文字(ヒエログリフ)が思い浮かびますが、文字に関して言えば、コプト語は古代ギリシア語と同じ文字を多く使用しています。これを読むのはなかなか難しいですが、幸いなことに図書館には日本語訳も入っています(注2)。

今年の秋のロング・チャペルでは、グノーシス研究の世界的大家である荒井献氏がやって来ます。この機会に、古代の人々の思索に触れてみることをお勧めします。

(注1) *The Facsimile edition of the Nag Hammadi codices* / Published under the auspices of the Department of Antiquities of the Arab Republic of Egypt. In conjunction with the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, Leiden, Brill, 1972-1984 12巻セット【開架(神学部) 192/091/F11e(1)~(12)】

(注2) 『ナグ・ハマディ文書I-IV』荒井献ほか訳、岩波書店、1997-1998【開架2階 192/091/N14i(1)、193/02/33-2~4】



新 図 書 館 建 設

新
向
け
て

第
二
回

図書館長 後藤 新治

学院創立100周年の2016年秋竣工を目指し、本館移設後の跡地によいよ新図書館の建設が始まります。昨年公表された「西南学院大学キャンパスグランドデザイン」の基本計画を受け、今年5月には「新図書館建設委員会」が発足し、すでに「答申書」が学長に提出されました。新図書館の基本理念は「情報空間」「交流空間」「遊戯空間」「歴史空間」です。

そこで2006年秋にスタートした「世界の図書館」を一時中断し、これから7回にわたって気鋭の図書館スタッフが「新図書館建設に向けて」と題した新連載を始めます。あわせて工事進捗状況などもお伝えしていく予定です。第1回目は学院創立以来の図書館の歴史。ご期待ください。

(国際文化学部 国際文化学科 教授)

西南学院大学図書館の歴史

～知の貯蔵庫から「大学の心臓」へ～

図書情報課 坂本 里栄

西南学院大学図書館の歴史は、前身の学院図書室にまで遡る。「西南学院70年史」や「西南学院図書館略史」を紐解くと、その歴史は建物の変遷から大きく4つの時期に分けることができる。

これから、各時代の図書館の様子を紹介していくが、大正時代から続く図書館の歴史は膨大で全てを書き尽くすことはできないため、詳細はweb掲載の年表をご覧ください。

(年表 <http://www.seinan-gu.ac.jp/library/ch-table.pdf>)

(第1期) 学院図書室時代 1923(大正13)～1942(昭和17)年

創設当時の事情ははっきりしないが、その前身は少なくとも学院設立期の西南学院図書館まで遡ることができる。西南学院図書館という名称ではあったが、この当時、実質は旧制高等学部校舎の東端に設置された図書室であった。ここでは、建物として独立した赤煉瓦書庫時代(第2期)より前の学院図書室時代について当時の様子を見ていこう。

1924年12月に高等学部本館に図書館附属書庫と閲覧室が増設され、併せて図書室規程が制定された。また、図書原簿の登録第1号である「ラスキン研究」は1924年12月4日に登録されたとあることから、この頃には図書室の体制がある程度整っていたことが分かる。

1926年頃図書館職員であった丸岡正介氏の図書館報18号(1961年12月)の回想録によると、当時から貸出制度をとっており、「殆ど貸出制度をとっていたので閲覧室はどちらかというと不要だった」と当時の様子をうかがい知ることができる。また、先に挙げた図書室規程には、1冊あたり1日10銭の延滞金の記述が見られ、このころから延滞金の制度



高等学部図書室(写真右手) 撮影時期不明

が採用されていたことがわかる。

(参考) 図書室規定第11条: 借受ノ期限ヲ過ギタルモノハ一日ニツキ過息金トシテ拾銭ヲ徴収ス。

管理面では、後に初代館長となる小野兵衛教授がその頃の図書掛を担当されており、図書館に関する研究をされていたこともあって、十進分類法による独自分類を採用され、図書館学に根ざした資料の整理が進められたという。この素地があったことから、その後、本学がごく初期から日本十進分類法(NDC)を採用することにつながったのであろう。

(参考) 「西南学院図書館蔵書目録」と「日本十進分類法(NDC)」の比較

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
西南	総記	哲学	宗教	基督教	文学(語学)	歴史・地理	法律・政治	経済・商業	理学	雑科
NDC	総記	哲学・宗教	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学

(第2期) 閉架式図書館時代(赤煉瓦書庫時代) 1942(昭和17)年～1953(昭和28)年

学院図書室時代は校舎の一部を書庫と閲覧室に充てていたが、蔵書数の増加に伴い収蔵能力の限界を迎えていた。また、生徒数の増加による教室不足も起こっていたことから、独立した建物としての図書館が求められるようになった。

これを受けて、第2期図書館となる赤煉瓦書庫は、学院創立20周年事業の一環として計画された。建設費用をまかなうため日米両国で総額30万円の寄付を募る計画があったが、第2次世界大戦の始まりにより計画は頓挫することとなる。

アメリカで予定していた募金は計画倒れとなったが、国内の募金は比較的順調に進み6万円が

集まったため、1942年に赤煉瓦書庫と木造の閲覧室が造られた。

場所としては、現在のキャンパス西側に建設された。北側に赤煉瓦書庫、当時あった構内道路を挟んで南側に木造の閲覧室が置かれ、事務室は両者をつなぐ道路上方にあるという図書館であった。ここから、独立した施設としての図書館の歴史がスタートすることになる。

建物の独立に伴い制定された規則から、当時の様子をうかがい知ることができるので、少し引用しよう。

(参考)

西南学院図書館閲覧規則第10条: 館長の許可なくして館員及び係員の他、閉架書庫に入ってはならない。

(参考)

西南学院図書館関係規定第16条2項: 帯出図書冊数は一冊とし、その期間は帯出日を含め六日以内とする。但し返却日が休館の時はその翌日迄とする。

この時代は、一部閲覧室内に備付図書はあったものの、基本的に閉架式図書館であり、利用者は自由に書庫へ入ることができなかった。館内の利用方法には当時としては一般的な制限があった一方、図書室時代から引き続き貸出制度を採用している。



赤煉瓦書庫 撮影時期不明

(第3期) 開架式図書館時代 1954(昭和29)年～1967(昭和42)年

第3期図書館を語るには、まず赤煉瓦書庫時代の最後から話を進めねばならない。

当時の図書館長である八田薫教授や中澤慶之助教授が図書館報に書かれた回顧録を確認すると、新制大学の認可にあたって、文部省から大学としての蔵書数が十分でないとの指摘を受け、図書館の充実が急務となったとの記述がある。事実、図書館報100号(1984年7月)に記載されている統計をみると、1945年の蔵書数は約17,000冊となっている。大学設置前後を回想した八田薫教授の図書館報20号(1962年10月)の記事に、1948年当時の蔵書数について中学生向きのもも含めて約2万数千冊と書かれていることから、新制大学として望ましい整備状況とされていた図書5万冊という目安からすると確かに十分とはいえない蔵書数であったことが分かる。この前提の下で、アメリカからの寄付や臨時予算の編成が行なわれ、蔵書数は急激に増えて行った。結果、赤煉瓦書庫の狭隘化につながり、建物の老朽化とあいまって新しい図書館の建設が求められるようになった。

このような経緯があつて、アメリカのミッションボード

からの寄付により、現在の学術研究所の西側に鉄筋コンクリート3階建ての図書館が建設されることとなる。

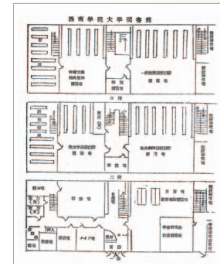
運用面から図書館をみると、第3期は九州地区で初めて開架閲覧方式を採用した画期的な図書館となった。この経緯をたどると、やはり赤煉瓦書庫時代後期に遡る。

坂本重武教授は当時既に館長職を退かれていたが、第3期図書館が建設される以前、1952～3年にかけて図書館報にてペイラー大学での図書館経験を語り、本学が学ぶべき諸点としてリザーブブック制度の紹介や開架式図書館の利点について言及している。1950年ごろからリザーブブックシステムが採用されていることから想像するに、図書館内では当時最新式の開架式(自由接架式)の運用是非についても盛んに議論されていたのではないだろうか。

導入に賛否両論があつたとはいえ、最終的にはこの流れを汲んで第3期図書館は開架式図書館として開館した。図書館報5号(1956年10月)の里見安吉館長の記事によると、開架式は、当時日本では、国際基督教大学、立教大学、神戸市立大学等数館がすでに採用し

ていたが、九州地区では本学が唯一の開架式図書館として充足したと記述されている。

続いて、組織の面から図書館をみると、新制大学として出発したものの開館当時の図書館は組織上未だ学院図書館であった。先の図書館報5号では大学図書館と学院全体の図書館としての位置づけが不明瞭であり改めて組織の位置づけを検討する必要性が言及されている。その後様々な議論を経て、1960年4月に学院図書館から、大学図書館へ改組が行なわれた。組織の歴史から見ると大きな転換点となった。



第3期図書館全景
1954年撮影
収蔵能力:10万冊、
座席数210席
総面積:1,285㎡
総工費約4,800万円、
ウオーリス建築事務所
図書館平面図
開架式であることがよく分かる

(第4期:前半) 学習図書館時代 1968(昭和43)年～1991(平成3)年

第4期図書館は、学生数、蔵書数の増加に伴う施設狭隘化の解消を主な目的として、第1次財政計画の一環として建設が計画された。

現在の図書館は、新館・旧館・積層書庫の3つの建物で構成されている。この3つの建物は別々の時期に建設されており、現新館の増築を境に2つの時期に分けることができる。

ここでは、前半にあたる現旧館と積層書庫について当時の様子をご紹介します。

第4期図書館の建設に取り組みされた坂本重武館長は、1968年前後に西南学院大学広報や図書館報で文部省答申「大学図書館施設計画要項」(1966年3月)にある大学図書館の持つ研究・保存・学習・総合の4つの機能について言及している。なかでも、新しく建設される図書館の1階に学習室を配置するなど、施設狭隘化の解消のみならず、学習図書館としての機能強化に注力したことが

当時の記事から読み取ることができる。

引き続き、西南学院大学広報や図書館報を辿ると、計画が最終決定されるまで紆余曲折があつたことが分かる。

例えば、建設場所としては、はじめランキン・チャペルと第3期図書館との間を予定地として計画が進められていたが、将来増築する余地が少ないということから、現在の位置に落ち着いたという。「西南学院70年史」や当時の図書館報を確認すると、資料の管理は図書館での一元管理とするか、旧図書館を研究図書館として残し、新しい図書館では学習図書館の機能充実に注力するかといった機能面、管理面での議論も随分あつたようである。

このように様々な議論があつたが、最終的に第4期図書館では、一元管理することに決まった。新しく建設された第4期図書館は、学習・研究・保存・総合の4つの機能を兼ね備えた総合図書館としての

位置づけが明確化されたといえる。

様々な議論のすえ建設にたどり着いた第4期図書館は、第1期工事として5階建ての鉄筋コンクリート、蔵書規模20万冊、面積で第3期図書館の3.5倍の規模で計画がなされた。続いて、1975年に行なわれた第2期工事では、5階の内装の完成、及び東側積層書庫が建設され第4期前半は最終的に60万冊の収容能力となった。

運用面では、第4期図書館でも引き続き開架閲覧制度を採用している。

第4期図書館(現旧館)全景
撮影時期不明
収容冊数:
20万冊、
座席数:450席
総面積:
4437.532㎡
総工費:1億
3692万1千円



(第4期:後半) 学習図書館時代 1991(平成3)年～2016(平成28)年(予定)

現旧館、積層書庫と拡大を続けてきた第4期図書館であったが、新館の増築をもって現在の姿を現すことになる。ここでは、新館の増築以降についてご紹介したい。

『西南学院大学広報』第96号(1991年4月)には新館増築の目的として以下の4つの項目が挙げられている。

- ① 施設狭隘化の解消
- ② 老朽化への対応
- ③ 利用効果の向上(電算化、学術情報のオンライン検索や学外データベースといった電子資料の導入)
- ④ 多様化の実現(閲覧・学習からグループワークへ)

この4つの項目を主な目的として、現在の新館は第6次財政計画により増築された。この増築により収蔵能力は前半の倍にあたる120万冊となった。

第4期図書館の後半は、施設面での改善と合わせて、サービス面での向上も図られた。前半と比べて、グループ学習室、視聴覚室の設置といった時代に合わせた学習環境が提供されることになったことが大きな特徴である。

また、この時代は電算化の波とも重なり、さまざまなことがシステム上での管理へ移っていった。学術雑誌の受入・管理の機械化は既に1976年から行なわれていたが、新館の増築計画に併せてその

ほかの業務も電算化に着手し、1989年には貸出・返却業務が機械化された。OPACでの検索が出来るようになったのもこの頃である。その後、学術情報サービスセンターのデータベースとの接続を経て、1991年、新館完成と時を同じくして図書館システムが全面稼働することとなった。

図書館利用の多様化に合わせて、1997年から学生向けの利用説明会を開始し、新入生を中心として各種資料の利用方法についての講習を行っている。2000年からは、図書館チューター制度を導入し、先輩チューターによる指導体制が整備されることとなった。

(第5期) 2016(平成28)年～(予定)

現在、検討されている新図書館は、「第5期」の図書館ということになる。

新図書館の基本理念は、「情報空間」「交流空間」「遊戯空間」「歴史空間」に決まった。この基本理

念が、これまでの歴史に付け加えられることとなるが、特に新図書館で主軸となるであろう要素として、「アクティブ・ラーニング」という言葉を挙げることができる。新図書館は、学習の質の変化に対応

し、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションといった要素を取り入れ、互いに刺激し合いながら成長できる図書館としたい。詳細については、今後の特集をご期待いただきたい。

DATABASE

データベース 紹介

図書館では、様々なデータベースを整備しています。図書館のホームページから、アクセスでき、全て無料です。データベースは、膨大なデータの中から、ワンクリックで必要な情報を探し出したり、リンクを辿って瞬時に関連情報のサイトにアクセスしたりすることができます。また、データベースを使いこなせば、情報収集の時短もできます。今回は、その中から3つのデータベースについてご紹介します。紹介文を読んで興味を沸いたら、すぐにアクセスしてみてください。

OED_Onlineのすすめ:古今英語語彙のドラマティックな履歴書 前編

文学部 外国語学科 英語専攻 教授 久屋 孝夫

アクセス方法：図書館HP>データベース>画面下方「契約データベース」の「辞書」をクリック>OED:Oxford English Dictionary

英語のわらべ歌 (Mother Goose's Nursery Rhymes「あががガチヨウ母さんの子守遊び唄」)にこういう一節がある:

What are boys made of?

They are made of frogs, and snails and puppy-dogs'tails.

What are girls made of?

*They are made of **sugar**, spice and everything nice.*

(男の子は何でできてるの?蛙と蝸牛と子犬のしっぽでできてるよ。)

(女の子は何でできてるの?砂糖と香料と心地よいものでできてるよ。)

これは、伝承の中に残るジェンダー規範の典型としてかつてやり玉にあげられた歌詞である。ここに登場するsugarの歴史は意外に新しい---特に塩(salt)に比較すると。OED_Onlineによると13世紀古フランス語からの借入語とある。英国が11世紀後半からおそ3世紀に涉り、フランス語を操る支配層(ルーツは9-10世紀ノルマンディーに定着した北歐バイキング)に牛耳られた証拠でもある。ブリテン島における英語の歴史が今から約1500年前、その始まりが5世紀半ばの欧州大陸からの西ゲルマン民族の移動にあることを想えば、彼らが長い間砂糖の文化を持たなかったことがわかる。

他方、塩は、たとえば地の塩(the salt of the earth)という聖書の中の隠喩(マタイ伝5章13節)で知られるようにOED_Onlineでは、950年頃のリンディスファーン聖書からの引用があり、語源的には、saltがドイツ語のsalz(都市名ザルツブルクSalzburg「塩の街」参照)などゲルマン語共通の語根に由来するだけでなく、ラテン語のsal (salad, salary, sauce, sausage)はいずれも「塩」を意味の構成要素としてもつ)ともつながっていることがわかる。英語において、塩は砂糖よりはるかに長い歴史をもっている。その理由は、塩が自然状態で粒や塊として発見されやすいのに対して、砂糖はサトウキビ(sugar cane)やサトウダイコン(sugar beet)など食文化の発達に伴って文化的に発見され、記録されるまでに時間がかかるからである。

Saltの英語文献記録は1000年ごろ出現となっているが、文字資料の希な時代ゆえに、おそらく古英語初期まで遡ると推定され、民族移動以前の欧州大陸居住時代にすでに塩の文化が保持されていたと解釈される。

さて、OED_Onlineの話に戻ろう。OED[The Oxford English Dictionary on Historical Principles]は英国で編纂された(歴史的原理に基づく、つまり時空軸に沿う変化を捉えた)世界最大最良で最も信頼できる英語辞典である。また英米という国境を超えた「地球語」としての英語の変容を記録しよう

としている辞書でもある。この華々しい成果は、編纂の発端となった19世紀半ばから数えて150年ほどの長い歴史の収穫と言うことができる。

以下にこの辞書のオンラインによるサービスが提供されるに至る歴史的ないきさつを含めたその概要と、アクセスによる平易な検索の実際について、二回に分けてふれさせていただく。

OED_Onlineはだれでも気軽に参照でき、正確な情報を調べることができる。これを引用することで、どの学問分野においても論文や学術書に正確さと客観的信頼を付与しうるアカデミックな辞書でもある。ただ専門的な辞書という感覚なくして、ポケット電子辞書を引くのと同様な容易さで、(語源や歴史的背景を含め)語の使い方に関する情報を、定義と多くの用例のセットによって確認することができるメリットは大きい。

以下に、この辞書の参照法の実際をいくつか示し、利用のきっかけに供したい。

1) 日本語起源の語の英語語彙への借入時期と、その使用文脈を調べることができる。(katana(1613), tatami(1614), samurai/satori(1727), yukata(1822), harakiri(1856), seppuku(1871), sayonara(1875), sashimi(1880), sensei(1884), judo(1889), tsunami(1897), manga(1951), ninja/yakuza(1964), sogo shosha(1967), karaoke(1979), kaizen(1985), sudoku(2000)など)。

Tsunami(津波)は、語源をtsu harbor(港) + nami wavesと規定し、1897年のLafcadio Hearn(小泉八雲) *Gleanings in Buddha-Fields*(「仏陀の国の落穂集」)に初出しており、Kaizen(改善)は、“A Japanese philosophy of continuous improvement in working practices, personal efficiency” という定義があてがわれ、1985年の新聞 *Chicago Tribune* の記事に現れるのが最初である (It features as obsession with daily improvement (kaizen in Japanese))。日本の企業文化への当時の関心が伺える例である。

後編(次号図書館報)へ続く



日経NEEDS-Financial Quest

商学部 商学科 講師 小野 慎一郎

アクセス方法：図書館HP>データベース>「テーマから探す」の「経済」もしくは「金融」にチェックを入れて「表示」をクリック>日経NEEDS Financial QUEST

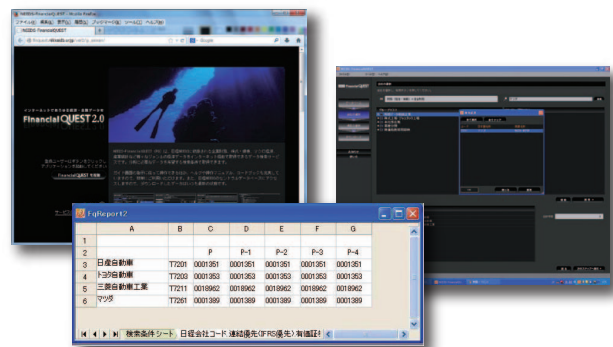
「日経NEEDS-Financial Quest」(以下、FQ)は、様々な経済データをインターネット経由で取得できるデータ検索サービスです。私は主に、企業財務データと株価データを取得するために利用しています。

FQの特徴としては、以下の3点などが挙げられます。第1に、収録データの多様性です。売上高や当期純利益などの主要数値だけでなく、注記の中で記載されるような補足事項の数値も収録されています。第2に、データの更新や取得の迅速性です。データベースには公表情報が素早く(主要な情報であれば公表日当日に)反映されます。そして利用者は、インターネット経由で最新のデータをいち早くダウンロードすることができます。第3に、Excel形式でのデータ出力です。FQの収録データは公表情報(例えば、企業の有価証券報告書など)に基づいているので、金融庁のサイト(EDINET)や企業のWebページなどからも同様のデータを入手することはできます。しかし、それらのサイトのデータはhtml形式やpdf形式ですので、集計や分析を行うには手間がかかります。FQからはExcel形式でデータを取得できるので、取得後すぐに集計・分析へと移ることができます。

私は主に2つの場面でFQを活用しています。まず、企業の財務諸表分析を行う際に、必要なデータをFQから取得します。財務諸表分析では様々な指標に関する企業間比較や期間比較を行うので、必要なデータの個数はかなり多くなります。FQを用いると、それらのデータを数分程度で一度に取得することができます。それから、研究で統計分析を行う際にも活用します。会計学の研究では、「前年度からの当期純利益の伸びが大きいほど、株価も大きく上昇する」など、会計情報に関する仮説の検証を行います。その際には、大規模サンプルに基づく統計分析を行うことが一般的です。日本の全上場

企業に関する過去数十年分のデータを使って、平均的に見るとその仮説が当てはまるかを調べたりするわけです。FQには、有価証券報告書提出企業の長期間(東証上場企業であれば1964年から現在まで)の財務データが収録されているので、そのデータを用いて統計分析を行うことができます。

ただし、文字情報はFQの収録対象外である点に注意が必要です。また、データの分析目的や分析手法、データ自体の特性を初めに理解しておかなければ、データベースは宝の持ち腐れになってしまいます。そのような点に気をつけてさえいれば、学生の皆さんにとっても、FQは非常に有益なものです。例えば、企業の財務データを用いた卒業論文作成や、就職先の財務分析などの際に活用できると思います。なお、FQは高価なので、日本のすべての大学が契約しているわけではありません。本学の学生の皆さんには、この価値あるデータベースをぜひ有効活用してほしいと思います。



日経BP記事検索サービス

図書情報課 山下 大輔

アクセス方法：図書館HP>データベース>画面下方「契約データベース」の「雑誌論文」をクリック>日経BP記事検索サービス

日々ちょっとした情報収集に時間を割くかどうか、短い期間においても大きな格差を生むことは図書館職員という職業柄、日々実感しているところである。私自身も大学関係の情報、図書館関係の情報等に加えて、日々世の中で起こっている事実幅広く目をとおすことを意識している。「さばらない」はもちろんなのであるが、「バランスよく」という観点も重要なものである。googleアラート等のネット上の様々な無料ツールやtwitter、facebook等のSNSツールも便利に利用しているが、それと併せてある程度精査された上で発信された情報も織り交ぜることにしている。国内の情報を集めることに重点を置いているのが、新聞記事のデータベースとこの日経BP記事検索サービスである。

日経BP記事検索サービスは、日経BP社の雑誌のバックナンバー記事を、オンラインで閲覧できるシステムである。「日経ビジネス」「日経トップリーダー」のようなビジネス誌、「日経パソコン」等のパソコン関連雑誌、「日経WOMAN」等のトレンド関係等様々な雑誌が収録されている。記事は、テキスト、pdfで提供されており、本文に対して検索をかけることも可能である。私の場合は、「図書館」「読書」「著作権」「大学」等複数のキーワードで検索をかけるが、最近面白かった記事としては、「日経ビジネスアソシエ」2013年9月号に掲載されていた「今、読むべき本 2013」という特集記事である。5パートから構成されており、読書の流儀、イチオシの本、マンガ、リーダーシップ、本との付き合い方と幅広い視点で特集が組まれていた。最後の本との付き合い方では、書店、図書館の使い方が取上げられており自分の周囲と比較して参考になった。学生諸氏にもお勧めできる特集だと思う。

また、このデータベースは、雑誌の表紙画像一覧から目次一覧へ遷移する

モードがあり、書店でブラウジングしている感覚で利用出来るのも良い点である。「業界動向ウォッチ」や「地域で頑張る企業」という業界・企業に特化したコーナーも整備されている。その日の気分や気になったこと、時間の余裕に合わせて楽しく利用している。

情報検索ツールの進化は目覚ましいが、今のところ、これだけ確認しておけば安心というものは無いようである。日々そのことを実感しながら情報の海を泳ぐのであるが、何にしても最初の一步が重要なのは言うまでもない。1週間続ければ、目にしなかった情報が入ってくる、不足している情報が分かってくる。疑問に思うこと、もっと知りたいことが、続々と出てくる。日々の情報収集、第一歩を踏み出してみませんか?日経BP記事検索サービスは、きっかけ作りにはよいデータベースである。日々の生活が楽しく豊かになることは、自信を持って保証できる。

困った時には、ぜひ図書館へ。ちょっとしたテクニックも併せてご紹介出来るかもしれない。



『ポール・ロワヤル古書シリーズ』

1655-1662 4冊セット [貴重書庫 116/0/87、135/2/25、891/0/7,8]



【図1】推論の科学、『ポール・ロワヤル論理学』(1662)。



【図2-3】文法学者クロード・ランスロによるギリシャ語学習のための教科書(1655)。



9月26日は「欧州言語の日」。東方拡大により現在では28カ国による緩やかな国家連合の形をとるEU(欧州連合)は、2001年、欧州評議会と共同で「欧州言語年」を開催し、記念日を制定した。EU加盟諸国はお互いの言語と文化を尊重する多言語・多文化主義に自らの未来を託し、異文化共存能力と外国語運用力の育成を欧州市民すべての課題として掲げている。

こうした汎ヨーロッパ的な多言語・多文化主義を、EU成立より遙か以前の17世紀にすでに先取りし教育や研究に実践していたのが、先鋭的な文化活動の中心地であったパリ郊外の「ポール・ロワヤル修道院」である。今回紹介する「Plurilinguisme à Port-Royal(ポール・ロワヤルの複言語主義)」というタイトルでまとめられた古書シリーズには、時代の常識を打ち破るポール・ロワヤルの先進的な言語教育に関する数々の貴重な資料が収められている。中でも、フーコーによる記号論的分析が1966年に大きな反響を呼び^(※1)、再評価されることとなった350年前の論理学の教科書『ポール・ロワヤル論理学』(アルノーとニコルによる共著)は、言語と記号の本質を近代的なヴィジョンのもとに焙り出した画期的な書物で、ことばそれ自体の研究が17世紀の認識論にとって、いかに思索の決定的な原点であるかを示す重要な証言となっている【図1】。

当時、イエズス会系の学校をはじめ、多くの教育機関では旧態依然として、ラテン語をベースに、国語であるフランス語をラテン語に翻訳して授業を行っていたのに対し、ポール・ロワヤルでは早くから、フランス語のみを用いて芸術や学問を論じる国語重視の学習法を採用していた。ポール・ロワヤルの「隠士」と呼ばれる博士や修練士たちは、その高い言語能力と並はずれた博学の才を駆使して、国語を雄弁な学術言語

に育て上げると同時に、それを取り巻く複数の外国語—ギリシャ・ラテンの古典語からドイツ語、イタリア語やスペイン語などの「現代語」まで—についての思考をめぐらせこれを理論化し、効率的な語学学習を目指して『新教本』(ランスロ著)を編集するなど、新たな教授法を次から次へと開発していった【図2-3】。文法が扱う言語も複数になり、フランス語という近代語の特質を、ラテン語の古い機構に引き戻すことなく外国語との比較対照によって導き出すことで、近代諸語を支配している新しい法則の発見も可能になったのである。

後世に永く名を遺すこれらポール・ロワヤルの学問的業績は、しかし、専ら学知的関心にのみ基づいて構想されたものではない。それは、カトリック内では異端の嫌疑を晴らすため、外部ではカルヴィニストの異端を糾弾するため、多くの神学論争を闘わねばならなかった彼らの、理論武装の書という性格も併せ持つ。「論理学」を丹念に読めば、近代的な記号論の背後にもう一つの記号＝「聖体」が浮かび上がるのを見極めることができるのだが、ここから先は研究者の領域である^(※2)。私たちは、当時の硬直した専制的な言語教育界の中で、ポール・ロワヤルだけが「言語・文化の共和国」として、言語に対する科学的態度を自由に展開させていった、という事実を確認しよう。多種多様な言語と文化の存在を認識し、これらに一樣に等価なものを発見しようという彼らの試みは、言語の平等を通して民主的ヨーロッパ社会を構築するというEUの目標へと確かにつながっている。

*1: Michel Foucault, *Les Mots et les choses : une archéologie des sciences humaines*, Paris, Gallimard, 1966. 【開架 135/9F2/3】

*2: 石川知宏『ポール・ロワヤル第五版増補と聖体論争—その(1)—』(東京都立大学人文報165、p.1-50、1984年)【開架 305/1】、塩川徹也『虹と秘蹟—バスク「見えないもの」の認識』(岩波書店、1993年)【開架2階 135/2P26/9】

【表紙】ポール・ロワヤルの指導的人物アントワーヌ・アルノーの書簡集(1657)。

編集後記

今号から新しい連載がスタートしました。2016年の新図書館竣工に向けて、関連する記事を掲載していく予定です。既に実施した新図書館建設検討のためのアンケート調査では、多くのご協力をいただきありがとうございました。皆様からいただいた貴重なご意見を参考に、活気があって親しみがある、西南らしい図書館を作るべく、スタッフ同心を一つに取り組みで参りたいと思います。「でも2016年にはもう卒業してるし…」と思ったあなた！西南の図書館は、卒業生の方もご利用いただけます。卒業後も使える西南の図書館。これからのように生まれ変わるのか、新連載を読みながら、楽しみにお待ちください。(Y.O)

西南学院大学図書館報 No.175

2013(平成25)年10月31日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>